

【教育研究ノート】

複言語サポーターの語りにみるカテゴリーの構築

相互行為分析の視点から

徳井 厚子*

キーワード

複言語サポーター, カテゴリー, 語り, 外国人支援

現在、国内においても国境を越えて移動する人々が増加し、多様な外国人支援の在り方が求められている。このような状況の中で、複言語サポーター¹（当研究では、本人自身が外国にルーツを持ち、複数の言語を状況や文脈に応じて駆使しながら学校や地域で外国籍住民をサポートしている支援者と定義する）は様々な役割を果たしている。

では、複言語サポーターは支援を行わないがどのように自分自身や外国人を位置づけようとしているだろうか。本研究では、複言語サポーターの語りにおいて、どのように「外国人」「支援者」といったカテゴリーが構築されていくか、そしてその中で自分自身をどのように位置づけようとしているのかについて、西阪（1997）の相互行為分析の視点からみていくものである。

西阪（1997）は、Sacks（1972）のカテゴリー適用における適切さ（レリヴァンス）に注目し、会話の中でどのように適切にカテゴリーが立ち上がっているかに着目し、分析を行っている。西阪は、留学生へのラジオインタビュー番組の1対1の会話を分析し、その結果、「日本人であること」

「外国人であること」が相互行為の偶然的条件に依存しながら、参与者たちがいわば協同で、相互行為的に達成されるとしている。西阪は、相互行為分析の視点について、「相互行為の秩序の根拠や現象を明らかにするのではなく、ある相互行為の秩序が具体的進行の中で、またその具体的進行を通してその時々相互行為上の偶然的条件に依存しながらいかに組織化されているかを記述していること」としている。西阪の相互行為分析の視点は、「日本人であること」「外国人であること」を既存のものとしてではなく、「相互行為的に」「立ち上がっていくもの」として動的に捉えている。このように「日本人であること」「外国人であること」を固定的に捉えるのではなく、相互行為の中で立ち上がっていくものとして捉えていく視点は重要ではないかと考える。これまで相互行為分析を用いた分析はいくつか見られる（森本、2001；吉川、2001）がこれらはカテゴリーの立ち上がりについては詳しく考察していない。杉原（2010）は「多文化間対話活動」の実践場面の分析から、カテゴリー化が質問をきっかけに起こり、質問、返答という相互行為の中で相互達成的に形成されていくということを明らかにしている。

インタビューの語りの中でカテゴリーを立ち上げることによってどのように語ろうとしているのかについてみていくことは重要ではないかと考える。

当研究では、カテゴリーの立ち上がり注目し、以下について相互行為分析の視点から分析・考察を行うことを明らかにする。

(1) 複言語サポーターは語りの中でどのように

* 信州大学（Eメール：tokuias@shinshu-u.ac.jp）

今回の研究はJSPS 科研費 26370600「複言語サポーターの複言語・複文化能力に関する研究——言語使用の実態調査を通して」（代表：徳井厚子）の研究成果の一部です。

1 当研究における「複言語サポーター」という名称は欧州評議会（2001/2004）の「複言語・複文化主義」の考えにもとづき、「pluriの想定する複合的、複層的（西山、2010）な側面を強調するために用いている。特に欧州評議会（2001/2004）の記述にある「複数の言語同士が相互の関係を築きまた相互に作用し合っている」という点に注目する。

カテゴリーを立ち上げているか。

- (2) これらの立ち上げたカテゴリーの中で複言語サポーターはどのように自分自身や外国人被支援者を位置づけているのか。
- (3) 語りの中でカテゴリーを立ち上げることによってどのように語ろうとしているのか

1. 研究概要

本研究の分析の対象とするインタビューデータは、複言語サポーターを対象に行ったものである。インタビューは半構造化の方法で行い、支援の内容、支援におけるコミュニケーション、仕事に対する思い、問題とその解決、悩み、周囲との関係、複言語サポーターの役割の可能性を中心に一人約30分から1時間かけて自由に語ってもらった。インタビューを行うに際し、研究成果の公表にあたっては本名を公表せずアルファベットもしくは仮名を使うこと、本人であることを推測できる情報は記載しないこと、本人の話したくないことを聞かれた場合は話すことを拒否する権利を持つことを条件にし事前にインタビューからの許可を得た。インタビューのデータは書き起こしを行った。

インタビューのデータは書き起こしを行い、異なる出身の4名のデータを取り上げ相互行為分析の観点から分析した。4名の性別、出身、支援の内容等は表1の通りである。なお、具体的な支援の相談内容はビザや結婚、仕事等におけるトラブルに関する相談である。

2. 分析と考察

複言語サポーターの語りを分析した結果、以下のように対立カテゴリーを立ち上げながら語っている様子が見られた。

2. 1. 「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーを立ち上げた語り

日本人であるインタビュアーに対し複言語サポーターが自分の出自や自分の国について説明を行っている語りにおいて、「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーが立ち上げている語りが見られた。そして自分自身を「外国人」の立場に位置づけていた。

2. 1. 1. 自分自身の出自に関する語り

まず、自分自身の出自に関する語りの中で、「外国人」「日本人」の対立カテゴリーが立ち上げられているのが見られた。(IAはインタビュアーを指す)以下は、インタビューの最初の部分でN自身が自分の出身や経歴について話した後の語りである。

IA: いろいろ外国籍の人たちを対象にいろいろお仕事されていますけれども、そういう外国人を対象にお仕事して中国語話者ということでこんな面が活かしているとかありますか。

N: そうですね。私自身も外国人ですから、母語としてはモンゴル語で、やっぱり中国語ですから、中国語も普通に話したり書いたりできるから…

Nは、「私自身も外国人ですから」と述べ、ここで「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーを立ち上げている。このカテゴリーの中で自分自身を「外国人」カテゴリーの中に位置づけている。自分自身が「日本人」ではなく「外国人」であることを明確に示そうとしているといえる。その後「母語としてはモンゴル語で・・・中国語もふつうに話したり書いたりできるから」と述べている。ここでは先に立ち上げた「外国人」カテゴリーをさらに細分化して「モンゴル語話者」「中国語話者」のカテゴリーを立ち上げ、自己をこれらの中に位

表1 インタビュイーについて

名前	性別	出身	インタビュー年月	支援の内容
O	女性	フィリピン	H24, 11	県の国際交流機関での外国人相談
N	女性	モンゴル	H22, 8	市の国際交流機関での外国人相談
E	女性	ブラジル	H24, 11	県の国際交流機関での外国人相談
I	女性	タイ	H23, 11	県の国際交流機関での外国人相談

置づけている。ここでは自身が「モンゴル語話者」「中国語話者」であることを明確に示そうとしている。

2. 1. 2. 外国人の子どもに対する日本の教育の対策についての説明の語り

外国人の子どもに対する日本の教育の対策についての説明の語りにおいて、「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーを立ち上げている語りが見られた。Nは、外国人が来日した時の手続きについて述べた後、外国人の子どもの教育について以下のように述べている。

N: あと、子どもの教育だったらどこに行けば私の子どもは入学できるんですかとか。日本の対策としては、外国人の子どもは必ず日本の学校で勉強しなければならないということがないから。でも子どもたちはやっぱり日本で生活しているから日本の教育も受け入れなきゃならないというところから親は子どもたちを学校に行かせたいと思うけれど

ここでNは、「日本の対策としては」と述べた後、「外国人の子ども」と述べ、「日本」対「外国」の対立カテゴリーを立ち上げている。日本における外国人の子どもの教育の対策についてインタビュアーに説明するためにこの対立カテゴリーを立ち上げたといえる。「日本」対「外国」の対立カテゴリーを立ち上げることによって、日本における外国人の子どもに対する教育の対策が日本人の子どもの場合とは異なるという差異を際立たせ説得力を持たせようとしているためではないかと考えられる。

2. 1. 3. 「〇〇人一般」に関する説明的な語り

「〇〇人一般」に関する説明的な語りにおいて、「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーを立ち上げている語りが見られた。Oは、フィリピン人の人たちが我慢強いために、問題が大きくなってからしか相談に来ないことについて以下のように語っている。

O: 行政にも私たちはこんなふう困っているんですけど言って伝えないと何も変わらないと思うんです。フィリピンの方々はわりと我

慢強いんです。自分でやろうとしちゃうから、自分でできなくなって問題が大きくなっていくわけなんです。

Oは、「フィリピンの方々はわりと我慢強い」と、フィリピン人を一般化して語っている。ここでは「フィリピン人」対「非フィリピン人」の対立カテゴリーが立ち上げられている。この対立カテゴリーが立ち上げられることで「フィリピン人」のカテゴリーに属しているインタビュアーのOが、「非フィリピン人」に属するインタビュアーの日本人に対してフィリピン人の一般的な特徴について説明する語りになっている。「フィリピン人」対「非フィリピン人」の対立カテゴリーを立ち上げることにより、インタビュアーに対してフィリピン人の特徴を説得的に語ろうとしている。

2. 2. 「外国人被支援者」対「支援者」の対立カテゴリーを立ち上げた語り

日本人であるインタビュアーに対し複言語サポーターが自分自身の支援の内容について語っている場面で「外国人被支援者」対「支援者」の対立カテゴリーを立ち上げている語りが見られた。

2. 2. 1. 「外国人被支援者」についての語り

まず、被支援者としての「外国人」に関する語りが見られた。以下は、Nが支援している場所がどのような場所であるかについて語っている場面である。

N: ここは、ただ日本語の勉強のための場所じゃなくて、何か困っているときにはぜひ来てくださいという場所になって、困っている外国人に本当に手伝ってあげる場所にもなっているんです。

Nは、「外国人被支援者」を「困っている外国人」とよび、「(困っている外国人=)外国人被支援者」対「支援者」との対立カテゴリーを立ち上げている。この対立カテゴリーの中でN自身は「支援者」に位置づけている。「困っている外国人」と述べることで、外国人被支援者の困っている状況を強調している。ここでの対立カテゴリーは語り手である「支援者」のNが「困っている外国人被支援者」に支援しているというディスコースを

生み出している。また、別の場面で、Nは、相談に来る外国人に対しての思いについて以下のように語っている。

N: ここに来ていてる外国人の方にも何か不自由なく日本で暮らすように手伝ってあげればいいかなと思ってるんですけども…

ここでは「支援者」対「外国人被支援者」の対立カテゴリーが立ち上がり、Nは自身を「支援者」のカテゴリーに位置づけている。ここでNは「外国人」ではなく「外国人の方」と呼ぶことで、自分の属するカテゴリーとは異なる「外国人被支援者」のカテゴリーであることを明確に示そうとしているのではないかと考えられる。そして「支援者」としてのNが「外国人被支援者」を支援しているというディスコースを生み出しているといえる。

2. 2. 2. 支援者としての「わたしたち」についての語り

「わたしたち」を「支援者」としてカテゴリー化する語りも見られた。以下はNの外国人学習者にとっての日本での生活の適応の難しさについての語りである。

N: (外国人被支援者は) 短時間で日本語を覚えるのが難しいですから、やっぱりある程度の時間がかからないと、この日本の生活に感じてこういうことをしなくちゃいけないとか、そういうものがわからないから。その前に私たちはできるだけ協力して手伝ってあげるといふことにして。

ここでの「私たち」は「支援者」を示している。このように語ることによって、「(私たち) 支援者」対「外国人被支援者」の対立カテゴリーを立ち上げている。このカテゴリーの中では、N自身は「わたしたち=支援者」のカテゴリーに位置づけられ、「外国人被支援者」とは異なる位置づけであることを示している。このように対立カテゴリーを立ち上げることによって、N自身を含む「わたしたち=支援者」が外国人支援者を「協力して手伝う」という支援者としての位置づけを明確にしているといえる。

2. 2. 3. 当事者としての「外国人」の立場に立った語り

「外国人」当事者の立場に立った語りも見られた。以下は、Nが外国人の保護者が子どもを日本の幼稚園に通わせる時に戸惑うことについて以下のように語っている。

N: 朝8時半に幼稚園に送ってくればいいのか外国人が思うんですけど、国の事情によって違うから、じゃあ送ってあげたら、先生がこういうものが必要ですからとか、外国人がわからないと思ってもその意味がわからないで。

この語りの中の「外国人」は「外国人被支援者」を示し、「外国人被支援者」対「支援者」の対立カテゴリーを立ち上げている。この中でN自身は「支援者」のカテゴリーに入っている。この語りの特徴は、「外国人が思うんですけど」のように「外国人」を支援者であるN自身とは異なる「外国人被支援者」に位置づけながらも、第一人称として語っている点である。第一人称として語ることで、外国人被支援者が、日本の生活の中でどのような状況に遭遇し、どのような点に困っていて、どのように感じているのかについてあたかも彼・彼女らの立場から本人自身の経験であるように語ることを可能にしているといえる。つまり当事者の立場に立った臨場感のある語りになっている。このように語ることで被支援者の現実的な状況をあらわに伝えている。N自身が被支援者と「外国人」としての体験を共有していることが当事者の立場に立った語り方を可能にしているといえるだろう。

2. 3. 「同国人カテゴリー」を立ち上げた語り

「支援者」「被支援者」の両者を含んだ「同国人カテゴリー」というくくりで語る場面もみられた。Eは、インタビュアーが「日本人のサポーターだったら、多分ブラジルの人から相談があってもなかなか対応できないことがあると思うんですね」と述べたのに対し、以下のようにブラジル人同士だと身近に感じることができると述べている。

E: 日本人のサポーターだったら、多分、ブラジルの人から相談があってもなかなか対応できないことがあると思うんですね。でも、ブ

ラジル人同士では、たとえばブラジルのことを聞いたり、出身はどこですか だいたい電話の相談なんですけれども。でも、そういうつながりのあるブラジルの場所はどこですかいろいろ。ブラジルのこともお話することによっては相手は身近に感じることがあるんですね。

Eは、「ブラジル人同士」と語ることで、支援者である自身と外国人被支援者を同じ「ブラジル出身者」というカテゴリーに入れている。この語りの中では「支援者」対「被支援者」の対立カテゴリーはなく、ブラジル人支援者もブラジル人被支援者も同じ「ブラジル人」のカテゴリーの中に入れ、「ブラジル人」対「非ブラジル人」の対立カテゴリーを立ち上げている。このように対立カテゴリーを立ち上げることで、ブラジル人支援者が「非ブラジル人」である「日本人サポーター」とは異なったカテゴリーに属していることを強調しようとしている。同時に被支援者の同国人として当事者の立場に立った支援を行っていることを強調しているのではないかと考えられる。

2. 4. 語りのディスコースにおけるカテゴリーの再構築

語りのディスコースの中でカテゴリーの再構築が行われている場面もみられた。以下はNが、支援している場所の状況について語っている場面である。

N: 一応、ここに来てくれる人たちは、中国籍とか、タイ、フィリピンの人が、日本語しゃべれない人たちが多くなんですけれども主に使う言葉としては中国語を使いますね。

Nは、最初「外国人被支援者」を「ここに来てくれる人」と述べ、「外国人被支援者」対「支援者」のカテゴリーを立ち上げている。N自身は「支援者」に位置づけている。その後、Nは「外国人被支援者」のカテゴリーを「中国籍」「タイ」「フィリピン」と再構築している。その後、「日本語しゃべれない人たち」と言い換えながらさらに再構築している。ここでは「日本語を話せる人」対「日本語を話せない人」の対立カテゴリーが立ち上がっている。Nは自分自身を「日本語を話せる人」に

位置づけ、外国人被支援者を「日本語を話せない人」に位置づけている。語りの中で立ち上がるカテゴリーは固定的ではなく、流動的であるといえる。

Iは、相談者との信頼関係を築くのに時間がかかるということを以下のように述べている。

I: 1回の電話で終わらないで、2回、3回まで、4回かな。本当のことを言ってだんだん信頼がありますので。やっと本当のことを言って「実は」とか。それも相談員、外国人相談員は、そのことも心の準備が必要だと思います。

Iは、最初は「相談員」と語り、「相談員」対「相談者」の対立カテゴリーを立ち上げている。その後、「外国人相談員」と「外国人」を付け加えた形で修正し、「外国人相談員」対「外国人相談者」のカテゴリーを新たに再構築している。I自身はこの中で「外国人相談員」として位置づけている。このように新たにカテゴリーを立ち上げることによって、語っている支援の内容が日本人サポーターも含む「相談員」全体にあてはまるのではなく、「外国人相談員」に特化した内容であるということを強調しているといえる。

3. 考察と課題

今回扱った複言語サポーターの語りの分析からの考察を以下に示す。

- (1) 複言語サポーター自身の出自や国についての説明的な語りにおいては、「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーを立ち上げ、自身を「外国人」のカテゴリーに位置づけてる語りが見られた。これは「日本人であるインタビュアー」に対し、「外国人である」複言語サポーター自らを「外国人」カテゴリーに入れることによってインタビュアーに対して「日本人」と「外国人」の差異を明確にし、「外国人」の異質性を強調しようとしているためではないかと考えられる。
- (2) 複言語サポーター自身の支援の内容に関する語りにおいては「支援者」対「外国人被支援者」の対立カテゴリーを立ち上げ、複言語サポーター自身を「支援者」のカテゴリーに

位置づけている語が見られた。また、支援者を「わたしたち」とよびカテゴリー化している語も見られた。「外国人被支援者」を「支援者」である自身とは異なる「支援される対象」として客観的に位置づけているのではないかと考えられる。

「外国人被支援者」を一人称で語る当事者の立場に立った語りもみられた。また、「支援者」対「被支援者」の対立カテゴリーを超えた「同国人カテゴリー」を立ち上げる語りも見られた。複言語サポーターが当事者と同じ立場に自らを位置づけながら支援していることを示唆している。

- (3) カテゴリーは固定的ではなく、語りのディスコースの中で再構築が行われ、流動的な場合もみられた。

複言語サポーターは、語りのディスコースの中で、「外国人」対「日本人」という対立カテゴリーや「支援者」対「外国人被支援者」、「〇〇人」対「非〇〇人」といった対立カテゴリーを立ち上げながら、状況に応じて自身の位置づけを「外国人当事者」「支援者」「〇〇人」と変えながら語っていた。これは、複言語サポーターが支援の現場で、ある時は当事者の立場、ある時は当事者とは一線を画した支援者の立場に立つなど複層的なアイデンティティを持ち、文脈に応じながら自身のアイデンティティを変化させているということを示唆している。

また、語りの中で「外国人」という言葉を用いていたが、「外国人」対「日本人」の対立カテゴリーでは「外国人」カテゴリーを指し、自身をこの中に含んでいるが、「外国人被支援者」対「支援者」の対立カテゴリーでは「外国人被支援者」を指し、自身を含んでいないなど、状況によって自らを「外国人」に含む場合と含まない場合がみられた。時には自らを「外国人」に含み、時には含まない等、境界にいる自身を「外国人」の枠の内と外に複層的に位置づけながら状況に応じて自身の位置づけ方を変化させているといえる。このことは複言語サポーターのアイデンティティが複層的かつ動的であることを示唆しているといえる。

今回扱ったデータは少ないという点で限界があるが、複言語サポーターの語りにみられたカテゴリー化から、複言語サポーターは、支援の現場の中

で、文脈に応じながら自身を「外国人当事者」に位置づけたり「支援者」に位置づけたりして変化させながら支援を行っていることが明らかになった。このように文脈により位置づけを変化させることで複言語サポーターは日本人サポーターにはなし得ない支援を行っているのではないだろうか。

多様な位置づけを行いながら支援を行っている複言語サポーターの存在は、これまで「日本人支援者」対「外国人被支援者」という二項対立的で固定的に捉えられがちであった支援の構造では捉えることができず、より複層的で流動的な構造へと支援の構造を捉え直していく必要性を示唆しているといえよう。複言語サポーターの多様な位置づけによる支援は、「支援の構造」そのものの問い直しにつながると考える。

Moore & Gajo (2009) は複言語・複文化能力は場面や時間によって流動的でダイナミックに変化していく特徴があると述べている。今回の語りでは複言語サポーターが文脈に応じ位置づけを変化させていることが示唆されたが、これは Moore らの述べる複言語・複文化能力の特徴とも深い関わりがあるといえるのではないかと考える。また、今回複言語サポーターが文脈を重視しながら位置づけを変化させていくことが明らかになったが、このことは文脈を重視し位置づけを変化させながらことばを使用する新たな言語能力の視点を提示しているといえよう。

今後の課題としては、多様なカテゴリー化の可能性やカテゴリーの流動性についてみていくと同時に、アイデンティティ、ことばの教育や複言語・複文化能力との関連からの考察も課題として挙げられる。

文献

- 欧州評議会 (2004). 吉島茂, 大橋理枝, (訳, 編) 『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社. (Council of Europe (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- 杉原由美 (2010). 『日本語学習のエスノメソロジー』勁草書房.
- 西阪仰 (1997). 『相互行為分析という視点』金子書房.

- 西山教行 (2010). 複言語・複文化主義の形成と展開『複言語・複文化主義とは何か——ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』(pp. 22-34) くろしお出版.
- 森本郁代 (2001). 地域日本語教育の批判的検討. 野呂香代子, 山下仁 (編) 『「正しさ」への問い』(pp. 215-248) 三元社.
- 吉川友子 (2001). 「異文化交流」の実際——滞日留学生と日本人の相互行為分析から. 野呂香代子, 山下仁 (編) 『「正しさ」への問い』(pp. 183-214) 三元社.
- Moore, D., & Gajo, L. (2009). Introduction-French voices on plurilingualism and pluriculturalism: theory, significance and perspectives. *International Journal of Multilingualism*, 6(2), 137-153.
- Sacks, H. (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social interaction* (pp. 31-74). New York: Free Press.

謝辞 当研究を遂行するにあたり、インタビューにご協力いただきました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。